

# 監修のことば

2017年の春に、青景聡之先生から、小倉崇以先生と二人で研修医や看護師、臨床工学技士、その他医療者に向けて書かれる予定のECMOに関する書籍の監修を依頼された。それが、この「やさしくわかるECMOの基本」である。

お二人は将来を期待されている新進気鋭のIntensivistであり、本書は研修医や看護師を目の前にして、ベッドサイドで説明をするようなスタイルで書かれており、非常にわかりやすく、堅苦しさがなく読みやすい。それでいて、新しい知識、ECMOのコツが見事に書かれていて、救急医療や集中治療の専門医にも刺激を与えることができる書籍である。監修をしていて、とても勉強になった。

両先生はイギリス、スウェーデンのトップレベルのECMOセンターで学び、その経験をもとに本書を書かれた。しかし、実は日本でも1970年代から'90年代にかけて熊本大学麻酔科で故森岡亨教授を中心に、膜型肺を用いた長期呼吸管理、心肺補助の研究、臨床応用が数多くされてきた。森岡先生はそれをECLA (extracorporeal lung assist), ECLHA (extracorporeal lung & heart assist) と呼び、セミナーを開催し普及教育活動もされていた。私は、確か'86年、'87年であったと思うが、当時所属していた札幌医科大学から熊本大学まで出向き講習を受けた。動物実験室ではECLAが装着されて数日経過したヤギが意識下で立っていたことを覚えている。まさに、awake ECMOを動物で行っており世界のトップの研究施設であった。

私は、'88年に札幌医科大学救急集中治療部のスタッフとともに、人工肺をスタンバイしておき、これを心肺停止患者に対して用いることを始めた。今のE-CPRであり、世界にさがかけて臨床応用した。これが後にPCPSとなり日本中の救命救急センターに普及することとなった。森岡教授は学術集会でことあるごとに、“札幌医大グループはECMOを心肺蘇生に使い始めた”と賞賛してくれた。

それ以前、札幌まで講演に来て頂いた寺崎秀則助教授（のちの熊本大学麻酔科教授）は、“ECMOがさりげなく長期に用いられるようになったときに臨床で受け入れられる時期であろう”と語っていた。当時、熊本で寝食を忘れ研究・臨床

に従事しておられた勝屋弘忠（前名古屋市立大学麻酔科教授）、須加原一博（前琉球大学麻酔科教授）、岡元和文（前信州大学救急科教授）、久木田一朗（現琉球大学救急科教授）各先生達を初めとした先人に敬意を払い、若きIntensivistsが“いま、その時期を迎えさせてくれている”と一緒に喜びを分かち、監修のことばとしたい。

2018年2月

岡山大学名誉教授  
氏家良人